



TITLE:

ハーバート・サイモンの多少混乱した概念

AUTHOR(S):

神崎, 宣次

CITATION:

神崎, 宣次. ハーバート・サイモンの多少混乱した概念. 実践哲学研究
2006, 29: 47-63

ISSUE DATE:

2006

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/59248>

RIGHT:

ハーバート・サイモンの多少混乱した概念

神崎宣次

ハーバート・サイモンの合理性に関連する一連の議論は経済学と心理学の領域のはざままで開始されたものであったが¹、近年では哲学・倫理学の分野でもサイモンに言及していたり、制約合理性 *bounded rationality* や満足化 *satisficing* といった彼に由来する概念を分析の対象や道具立てとして扱っていたりする文献が増えてきている。それらの文献の中で特に重要なものとしてはマイケル・スロートとフィリップ・ペティットの間で行われた満足化概念に基づく帰結主義に関する専門誌上での論争 (Slote 1984; Pettit 1984) を挙げることができるが、その他にも、満足化概念と徳との関連を扱った議論 (Slote 2004; Swanton 1993; 2004; Weber 2004)、意志決定過程の「停止規則² *stopping rule*」として満足化概念を解釈しようというデヴィッド・シュミッツやマイケル・バイロンなどの議論 (Schmidtz 1995; Byron 1998; Richardson 2004)、満足化は合理性の概念としては不適切であるとする議論 (Michalos 1972; Dreier 2004)、制約合理性概念と満足化概念を進化倫理学の議論の中で鍵概念として用いている議論 (内井 2000) などがある。さらに最近では、実践的理性としての満足化概念を検討する論文を集めたアンソロジーも出版されている (Byron ed. 2005)。

このような現状についてバイロンは、道徳理論という比較的狭い領域でさえこれ

¹ 経済学で伝統的に想定されてきた理想的に合理的な行為者と、心理学で研究されているさまざまな制約を負った現実的な行為者とを対比させるという問題設定は、初期の二つの代表的な論文などで既に明確に提示されている (Simon 1955; 1956)。

² 最善ではないにしても十分満足のいく選択肢が見つかった時点で意思決定過程を停止し、その時点で選択を行うという意思決定上の戦略のこと。本文のこの後に名前が出てくるシュミッツに由来する、倫理学の文献において現在最も有力といえる満足化概念の一つの解釈。

ほどの多様な観点からの議論があることは注目に値すると述べた上で、さまざまな議論が錯綜しているこのような状況では「参加者たちが同じことについて語っているのかどうか」が問われてしかるべきだとしている³。彼自身はこの問いに答えようとはしていないが、ゲルト・ギーゲレンツァーによるとサイモンの作り出した概念は「その初期のあいまいな定義のために、多くの人にとって多くのことを意味するようになって」しまっている⁴。彼のこの記述に従えば、サイモンの概念の解釈のされ方は実際に混乱しているだけでなく、その原因の少なくとも一部はサイモン自身にあるのである。

本論ではこの点についてギーゲレンツァーと同じ見解をとった上で、特に哲学・倫理学においてこれほどさまざまな分析がなされてしまっているのには、概念を受容した側の関心に基づく理由と、サイモン自身の研究に帰されるべき理由とがあることをそれぞれ示したい。なお本論では、倫理学や哲学の領域でのサイモンに由来する概念の解釈がどのように多様であるかという、諸解釈の実質的内容の分析には踏み込まない。この課題については稿を改めて論じるつもりである。

倫理学ではサイモンの議論はどのように扱われてきたか

先に挙げた例から明らかなように、倫理学の分野でサイモンに由来する概念が言及される際に取り上げられてきたのは主として満足化概念であった。そうなった理由の一つは、倫理学の領域での議論においてサイモンの研究が取り入れられたそもそもの動機が、最大化（最適化）概念⁵に基づく帰結主義、特に功利主義に対する批判、あるいはより控え目には、それらに対するオルタナティヴを示すことにあったという経緯にあると思われる⁶。満足化概念は最大化概念と対をなすものとして、それ

³ Byron 2004: p. 1.

⁴ Gigerenzer 2004: p. 389.

⁵ 本論では最大化と最適化を相互に入れ換え可能な用語として扱う。

⁶ たとえば、スロートは先に挙げた満足化概念に基づく帰結主義を論じた論文の中で次のように述べている。(行為) 功利主義は、1) 行為の正しさは非個人的に判断された帰結にのみ依存する、2) ある行為の正しさは、その行為が最善の帰結をもつことに依存する、という二つの考え方からなっているが、帰結主義にとってはこの二つは分離可能である。「このことがいかにして可能かを示し、結果と

との関連において倫理学の議論に導入されたのである。

それに対して、同じくサイモンに由来する重要な概念であるにもかかわらず、制約合理性概念の方はそれほど詳細にはとりあつかわれてこなかった。その証拠を一つ挙げるならば、先に挙げたアンソロジーでは信じがたいことに、制約合理性という用語は巻末の重要項目の一覧に含められてすらいないのだ。これら二つの概念はサイモンにおいては互いに密接に結びついた概念であったのだが⁷。

もともとあった制約合理性概念との結びつきが軽視され、その代りに最大化概念との対比が強調されたというこの経緯が、倫理学における満足化概念の取り扱い方を規定しているように思われる⁸。以下の議論を先取りして述べれば、現実の人間の合理性にはさまざまな制約が存在するという事実に関する概念から切り離され、帰結を最大化しなければならないという規範に関わる概念との対比関係が前面に出されることによって、満足化概念を代表とするサイモンの研究は倫理学の文献において、おそらく彼自身が考えていた以上に、規範的あるいは指令的な意味合いを持たされてきたのである⁹。本来の議論の意図や文脈から切り離されたかたちで検討されていること、このことが倫理学の文献において満足化概念が、あまりにも多

して（行為）帰結主義の概念を有用な意味において拡大すること」、いいかえれば、最大化に基づくという伝統的な帰結主義観は帰結主義の一形態にすぎないことを示すのが主要な目的である、と。（Slote 1984: pp. 139-140）

またスワントンも次のように説明している。「満足化の道徳的許容可能性を受けいれる主な動機は、倫理の要求の厳しさを軽減させることにある。『要求の厳しさに対する異論 demandingness objection』は伝統的に帰結主義に向けられてきた・・・」（Swanton 2004: p. 176）

⁷ たとえば、サイモンの初期の論文を集めた論文集（Simon 1957a）の第四部冒頭に置かれた解説のための論文（Simon 1957b）を参照のこと。この第四部は、既に脚注内で挙げた重要な初期の二つの論文を収録しているだけでなく、制約合理性や満足化といった定着した用語が用いられている最初期の文献の一つがこの解説文であるという点においても、サイモン研究にとって重要である。

⁸ 誤解がないよう一応断っておくと、伝統的に経済学で想定されてきた全能的かつ最大化的な合理性を持つと仮定される経済人 *economic man* が非現実的なモデルであるという認識に基づいてサイモンも議論を発展させていったのであり、サイモンにおいても満足化概念が最大化概念と対比されていたことには違いはない。『経営行動』（Simon 1945）第二版序文などを参照のこと。

⁹ この論点については本論の後の部分で論じる。

様な解釈を与えられることになった理由の一つといえるだろう¹⁰。

サイモン自身の議論

ではサイモン自身は、満足化や制約合理性概念について、またそれらの概念を含めた合理性全体について、どのような議論を行っていたのだろうか。まず、合理性とはどのようなものと彼は考えていたのかを確認しておこう。ある辞書のために執筆した「合理性」の項目の冒頭で、彼は次のように述べている。

大まかに言うならば、合理性は（A）所与の目的の達成にとって適切な、かつ（B）所与の諸条件と諸制約によって課される制限内での、行動の様式のことを指す。¹¹

ここからとりあえず、サイモンの考える合理性概念には以下のような三つの特徴があることがわかる。まず、合理性、あるいは合理的という用語が適用される対象は、行動の様式であるとされている。合理的であったりなかったりするの（の様式）だという立場は、満足化を述べた最初期の重要な論文（Simon 1955）のタイトルが *A Behavioral Model of Rational Choice* とされていることや、彼の行動経済学との関わり¹²にも表われている。ただし、次の制約合理性概念の規定に見られるように、サイモンは意思決定とそれに基づいて生じる行動とを区別していない。次に、目的は所与のものとして扱われ、目的自体の合理性は問われていない。このことには、彼の研究の出発点が経済学の中でも組織論や経営学であったが、その研究

¹⁰ この論点については本論では詳しくは扱わず、稿を改めて論じることにする。ただ簡単に述べておくと、たとえば満足化概念が人間の合理性の限界という考えから切り離された結果、最善の選択肢を選ぶことができるとは限らないというよりも、最善を選ぶことができる場合において最善ほどよくはないが十分よい選択肢をあえて選ぶという「最善を選ぶのをさし控える」こととして満足化を考えるスロートのような解釈が可能となるのである。このような制約合理性概念から切り離された満足化概念をスロートは内在的満足化と呼び、制約合理性概念と結びついた満足化概念と区別している。（Slote 2004: p. 14）

¹¹ A Dictionary of the Social Science. The Free Press. 1964. ここでは実際には、論文集（Simon 1982: pp. 405-407）に再録されたものを参照している。

¹² ダニエル・カーネマンは「制約合理性の見取り図：行動経済学のための心理学」という論文（Kahneman 2003）の冒頭で、サイモンの先駆的な貢献に触れている。

の対象となる企業や組織の目的は、倫理学などにおける行為者の目的と比べて、比較的明らかといえるという事情が関係しているかもしれない。最後に、行動が生じる環境に内在する条件や制約によって課される制限が重要視されるという特徴もある。ある行為者の行動が合理的であるかどうかは、行為者の能力や行動そのものだけによって決まるのではなく、その行為者に課されている課題や環境との関係にも依存するのである¹³。

次に制約合理性についてはどのように考えられていたのだろうか。この概念については、比較的まとまったかたちで「制約合理性の原理」をサイモンが提示している文献がある。

複雑な問題を定式化して解決するための人間の能力は、現実の世界における客観的に合理的な行動のために—あるいは、そのような客観的合理性に対する適当な近似のためにさえ—その解決が必要とされる諸問題のサイズと比較して、非常に小さい。¹⁴

また、ある経済学辞典の「制約合理性」の項目の冒頭では次のように書かれている。

「制約合理性」という用語は、意思決定者の認知上の諸制約—知識と計算処理能力の両方の限界—を考慮に入れる合理的意思決定を指すために用いられている。¹⁵

これらの記述からわかるのは、制約合理性という用語は（たとえば推論能力のよ

¹³ Simon 1956. を参照のこと。またギーゲレンツァーも環境の重要性について次のように述べている。「制約合理性は一丁の鋏のようなものだ。精神が一つの刃で、環境の構造がもう一つの刃だ。行動を理解するためには、両方を見て、それらがどのようにかみ合っているかを見なければならない。」(Gigerenzer 2004: p. 396)

¹⁴ Simon 1957b: p. 198.

¹⁵ Eatwell, Milgate and Newman (eds.) 1987. (ここでは実際には、Simon 1997, pp. 291-294. に再録されたものを参照している。)

うな) 人間の能力のあり方というよりも、ある種の合理的意思決定そのものをこの引用部では指している¹⁶ということである。そして、経済学などで伝統的に想定されてきた理想的に合理的な行為者の持つ客観的合理性¹⁷とは対照的に、現実の人間が持つ合理性には、利用可能な選択肢、各選択肢から帰結する諸帰結の予測、そして各帰結に割り振られる価値などについての知識や推論能力の限界がある¹⁸。にもかかわらずそれが「合理性」であるとされるのは、実際の人間の決定や行動は完全に合理的ではないにしても、合理的であることが意図されており *intendedly rational*、また実際に目的を達成するのにしばしば十分効果的であるからである¹⁹。

最後に、満足化についてもみておこう。同じ辞典の「満足化の項目」で次のように述べている。

何らかの基準に照らして最善の利用可能な選択肢を選択する意思決定者は最適化を行っているといわれる。特定の基準を満たすか超えているが、唯一の選択肢であるとも、またいかなる意味でも最善のものであるとも保証されていない選択肢を選択する意思決定者は、満足化 *satisfice* を行って

¹⁶ しかし、別の箇所ではサイモンは制約合理性を、人間の知識と計算処理能力といった能力の限界全体を指す用語として説明している。 Eatwell, Milgate and Newman (eds.) 1987. の Behavioral economics の項目。(ここでは実際には、Simon 1997, pp. 277-290. に再録されたものを参照している。) このような記述のくい違いについて、サイモン自身がどう考えていたかは次の節で説明する。

¹⁷ 「そしてある意思決定は、実際にそれが所与の状況において所与の諸価値を最大化するのに的確な行動である場合、「客観的に」合理的と呼ばれるかもしれない。」(Simon 1945: p. 85) 下線部は原文での強調部分。

¹⁸ Simon 1945: p. 93.

¹⁹ 「組織を観察してきた経験のある者にとっては、その内部における人間の行動は十分に合理的ではないにしても、少なくともおおよそ意図の上では合理的であるということは、十分明白であるように思われる。組織における多くの行動は課題志向的—そしてしばしばその目的を達成するのに有効—であるか、もしくはそうであるように思われる。・・・組織の中で示される合理性は、経済人に与えられていたような巨視的な全能性など持たないということは、同じくらい明白なことであり、したがって組織と管理の真正な理論の余地が存在するのは、まさに現実の世界においてなのである。」『経営行動』第四版で付加された、原著第四部に対するサイモンのコメント (Simon 1945: p. 88) 下線部は原文での強調部分。

いるといわれる。²⁰

この引用部の後で、**satisfice** という語は **satisfy** のノーサンブリアン方言として OED に出ているものを、サイモンが 1956 年の論文において専門用語として用いたと自分で説明している。ここで一点注意が必要である。たしかに **satisfice** という語はその論文で用いられているが、後に一般的に用いられるようになる **satisficing** という用語のかたちではまだ用いられてはいない。そのかたちで用いられるようになったのは、おそらくその翌年あたりからである²¹。

もう一つ注意が必要なのが、ここで引用した比較的すっきりした定義や説明は 1987 年というサイモンの研究人生の後期において書かれたものだという点である。次節で説明するが、サイモンは自らの研究の展開においてそれほど概念の一貫性や議論の体系化を重視しないタイプの研究者であった。したがって、特に倫理学者や哲学者によって満足化概念や制約合理性についての議論の典拠として参照されることの多い初期の文献 (Simon 1945; 1955; 1956. など) において述べられていることが、ここで示したいいくつかの「定義」と一致しないかもしれないという疑いが提出されることになるだろう²²。

概念の混乱 1: 議論の非体系性

さきにも述べたが、倫理学の領域でサイモンに言及される場合、満足化概念のみ分析の対象とされることが多く、制約合理性については十分な検討はなされない傾向があった。実はサイモン自身の議論においても、制約合理性概念は（そして満足

²⁰ ここでは実際には、Simon 1997, pp. 296-298. に再録されたものを参照している。

²¹ Simon 1957b. では既にこの用語が定着しているが、この用語が最初に用いられたのが正確には何処でかはよくわからない。サイモン自身が後年の文献などで、他の初期のいくつかの文献 (Simon 1945; 1955. など) をこの概念に関連する自らの研究の最初期のものとして挙げているが、正確に言えば、これらの文献ではこの用語そのものは使われていない。

²² たとえばペティットも、サイモンの満足化の議論の参考文献として初版が 1945 年に出版された『経営行動』から 1978 年のものまで全部で六つも挙げた上で、サイモンの満足化の概念規定の混乱について次のように述べている。「満足化戦略を私なりに特徴づけるに際して、私は多少の特権を行使した。というのも、サイモンは時により関連してはいるが異なった複数の方針を満足化のそれとして記述し

化概念も) 厳密な内容や定義が与えられた上で用いられていたとはいいがたい。実際、ある私信の中で彼は次のように述べているという。

わたしは、制約合理性と満足化のどちらについても、正確に定義されたテクニカルタームであると考えたことはありません。むしろ、現実には注意を払うべきだと経済学者達に気づかせるための合図や、彼らがとるべき方向性に関する示唆と考えてきたのです。²³

つまり、サイモンは彼が作り出し、現在もさまざまな分野に影響を及ぼしている二つの重要な概念について、それらの内容が曖昧であると自ら認めているのである。なぜ曖昧であると自ら認めるような概念を彼は使い続けたのか。同じ私信の中で、サイモンはその理由を述べている。

私が幾分曖昧な用語—たとえば制約合理性のような—を用いている主な理由は、次のようなものです。経済現象に関する経験的に裏づけられた理論を創るという問題を「解決した」と私が考えているという印象を与えたくない。・・・われわれの前にはまだ、企業やその他の経済に関わる状況において生じる現実の意思決定の過程を研究するという大きな仕事が残っている・・・²⁴

ここからはサイモンが自分の仕事を現在進行中の、理論としては未完成なものと考えていたらしいことが読みとれる。ジョセフ・ピットも、サイモンの初期の研究を扱った論文において、サイモンには「合理的意思決定の一般モデルに対する嫌悪感」があると述べ²⁵、少なくとも初期のサイモンは自分の議論を体系化しようとは

ているからである。」(Pettit 1984: p. 166. 注3)

²³ Gigerenzer 2004, p. 406. で全文引用されている著者宛ての私信より。この私信は、サイモンが自分の議論で用いているいくつかの重要な概念について、それぞれの意味や、それら相互の関係について簡潔かつ明晰に語っているという点で重要な資料である。

²⁴ *ibid.*

²⁵ いくつかの論文集のタイトルに *Models of Man* や *Models of Bounded Rationality* という表現が見られることから、合理的な行動を説明するモデルの複数性という彼の考え方が表われているように思

してないことに読者の注意を引いている。そしてその上で、その論文における彼の結論をサイモンの後の仕事にまで拡張して当てはめるつもりはないと断っている。

ハーバート・サイモンは高くそびえ立った知性だった。あらゆる高くそびえ立った知性がそうであるように、彼は決して成長をやめなかった。したがって、彼の業績の実体に、それを台無しにするような同一性という幻想を押し付けるのは不公正というものである。²⁶

彼の研究領域は次第にその出発点である経済学や組織論を越え出ていき、最終的には政治科学、認知科学、社会心理学、論理学、A I といった広範な分野にまたがるものとなっていった²⁷。研究者としての長いキャリアにおいて、彼は多岐に渡る分野で重要な貢献をなしており、さまざまな分野に属する読者が彼の議論に関心を持ってきた。だがサイモンは、自らの研究の時間的あるいは垂直的な進展において概念の統一性をあまり重視しなかったのと同じように、彼の研究領域の空間的あるいは水平的な広がりにおいても議論の体系化を避けていたように思われる。ピットは、この点についてサイモンが次のように述べていると指摘する。

サイモンは続けて次のように言っている。[論文集に収められた]これらの論文を書き直して、体系的な記述に収まるようにしようといういかなる企てにも抵抗してきた。さまざまな分野の読者が自分自身の好きなようにそれらを関連づけられるようにしたかったのだ、と。²⁸

サイモンの業績群は合理性あるいは（合理的）意思決定を分析の対象としてなさ

われる(Simon 1957a; 1982)。

²⁶ Pitt 2004, p. 486.

²⁷ サイモンの研究の全体像およびその年代的な変化については高の著書 (高 1995) で詳しく取り扱われている。

²⁸ Pitt 2004, p. 483. なおこの引用部で言われている「論文集」とは、Simon 1957. のこと。

れたものであるが、全体として一つの理論を形成するようなものではなく²⁹、現実の行動の中に見いだされる合理性や意思決定のさまざまな側面をさまざまな角度から切り出してモデルとして記述して、分析を行っている多数の研究からなるとみなされるべきかもしれない³⁰。そうだとすると、サイモンのどの文献を参照するかによって、彼が作り出した概念に対する理解や解釈が変わってくるだろう³¹。彼の生み出した概念の解釈が多様なものとなっているのは、少なくともある部分は、彼自身の研究が互いに必ずしも完全には整合的ではない多様な断片からなっていたという事情にも由来するのである。

概念の混乱2：記述のための概念か、それとも規範のための概念か

そもそもサイモンはどういう目的で人間の合理性についての研究を始め、これらの概念を作り出したのだろうか。初期の主著である『経営行動』(Simon 1945) は学問領域としては経営学に属する著作であり、組織の経営あるいは管理がテーマとされていた³²。その初版の序文の冒頭で彼はこう述べている。

この研究は、行政管理の分野での私自身の研究に役立つ用具をつくりあげようとする、一つの試みを示している。それは、この分野では、簡単な管理組織さえも、現実的な意味のある説明をする一すなわち、その構造と活動の効果を科学的に分析する一ための言語上、概念上の適切な用具が、まだないという私の確信から由来している。・・・

²⁹ 「サイモンの仕事は・・・満足化[の過程]をいかにデザインするかに主に焦点が置かれていた。その諸々の成果には、さまざまな現実の存在者や政策をモデル化するという記述的な価値はあったが、制約合理性の一般的な規範的枠組みは展開されなかった。」 (Russel and Subramanian 1995: p. 4)

³⁰ 合理的意思決定のさまざまなモデルが持つそれぞれの「風味」は主に、そのモデルにどのような制約が所与として導入されるかによって決まる、とサイモンは述べている。 Simon 1956: p. 242. 既に本文でも触れたが、そのような制約の例としては利用可能な選択肢や知識に関する制約などがある。

³¹ 既に本文で示したようにサイモンは自分の概念に厳密な定義を与えたことはない。そのため、サイモンに言及する際にそれぞれの論者が参照先として挙げている彼の文献はばらばらである。

³² 『経営行動』以前にサイモンが行っていたミルウォーキーのレクリエーション施設の研究については、高 1995: pp. 7-23. で述べられている。

われわれが、管理についての不変の「原理」をうちたてるには、そのまえにまず、管理組織がどのようなものであり、どのように働くかについて、正確に言葉で記述できなければならない。管理についての私自身の研究の基礎として、そういった説明を可能にするような用語をつくりあげようと試みた。そして本書には私が到達した結論が記してある。これらの結論は管理の「原理」を構成してはいない。仮説として提出された若干の言明を除いて、管理についての原理は主張されていないからである。³³

この引用部からは、少なくとも研究の出発点においてサイモンの意図としてあったのは、組織のふるまいを説明するための記述的な概念を作り出すことだったとわかる。このことについては、アレックス・マイクロスも次のように述べている。

まず着目されるべきは、マーチとサイモン は、彼らが主として関心を持っているのは、人びとが合理的に決定を行うべき仕方に関する指令にではなく、合理的な意思決定の「適切な」記述であると主張していることだ・・・

34

しかし、組織論から制約を負った合理性のモデルについての研究に移行するにつれて、いいかえれば満足化に基づく合理的意思決定が議論の前面に出てくるにつれて³⁵、満足化概念を規範的あるいは指令的側面³⁶が含まれているものとして解釈する余地が出てきているように思われる。 そのために、次のような解釈も提出されて

³³ Simon 1945: p. xi. 邦訳: pp. 47-48. ただし、本文と合せるため、一部訳語を変更した。

³⁴ Michalos 1972: p. 432. ここでマイクロスが言及の対象としている文献は、March and Simon 1958。

³⁵ 『経営行動』は組織における意思決定についての研究であって、合理的意思決定のみについての研究ではなかったということには、サイモンの議論を解釈する上で注意が必要である。この点については第二版序文でのサイモン自身の説明を参照のこと。

³⁶ 合理的思考のモデルとしての規範的モデルを更に規範的モデルと指令的モデルとに区別するバロンのような立場もある。彼はこの二つを区別するのは自分のアイディアだが、サイモンの文献 (Simon 1957b) の中で既に暗に示されているとしている。「記述的モデルは思考の過程あるいは産物を記述する。規範的モデルは合理的思考の産物が満たすべき諸条件に関連していると通常は考えられるが、私はここでは少し異なった見方を採用している。指令的モデルは思考の過程がいかに進むべきかを特定する。」 (Baron 1985: pp. 8-9)

いる。

少なくとも初期には、彼は最大化的な概念よりも人間にとってより適切なものとして、その合理性のモデルを規範的なモデルと記述的なモデルの両方として提示している。³⁷

また、上で引用した部分に続く箇所ではマイクロスが述べているように、「合理性」という言葉には通常評価的な意味が負わされるので、この言葉を非評価的な記述として用いられないかもしれない。すなわち「それらの言葉で何が意味されていようとも、人びとは自分自身のことを合理的であると考えたがるし、また合理的であるべきだと信じている」³⁸のである。したがって合理性に関わる概念の分析においては、研究者本人が着目している側面が何であるかは別として、その概念から規範的あるいは指令的な側面を完全に排除することは困難だろう。むしろそうでなければ、倫理学の文献において満足化概念がこれほど論じられることはなかったかもしれない。

このような見解を裏付けるように、『経営行動』初版から十年後にはサイモン自身が、現実の意思決定の過程により近づくようモデル化された「合理的意思決定」のいくつかの定義を示した上で、これらが記述的な価値と同様に規範的価値も持つと書いているのである³⁹。したがって、以上をまとめて次のように言ってもよいだろう。サイモンの研究が記述的なものであったか、それとも規範的なものであったかは、本人の意図および認識という観点でいえば、その答えは時期によって異なっている。ただし、合理性という言葉自体に負わされている意味のために、規範的側面が入り込む余地、あるいは少なくとも規範的側面が読み込まれる余地が常に存在

³⁷ Byron 2004: p. 4. ただし、ここでバイロンの言う「初期」がどのあたりの文献を指しているのかは不明。ただし、バイロンは別の文献では「サイモンを規範的な理論家としてではなく、むしろ記述的な理論家として考えることには魅力がある」と述べている。(Byron 1998: 注6)

³⁸ Michalos 1972: p. 432. 下線部は原文での強調部分。

³⁹ Simon 1955: p. 256.

しているのである。

結語

本論では特に倫理学および哲学の領域に属する論者たちによる、ハーバート・サイモンに由来する概念の解釈について、あまりにいろいろなことが言われてしまっているように思われる理由をいくつか検討した。その結果、功利主義を代表とする最大化主義に対する代替案としてそれらの概念を受容したという倫理学者側に帰される理由がある一方で、それらの概念について厳密な定義を与えようとはしなかったというサイモン自身に帰されるべき理由もあることが示された。実際、サイモンが作り出した概念について多くの人が語っているのだが、その際かならずしも同じことが語られているわけではないのだ。これは学問上の概念としての欠点なのだろうか。

そう結論づける必要はないかもしれない。本文中で引用したとおり、サイモンは自分の研究をさまざまな分野の研究者がそれぞれの関心にしがたって好きなように扱うことを望んでいた。そして現在、倫理学者はその通りにしているのである。多少の混乱を伴いつつもさまざまな解釈を誘いだすだけの内容の豊かさと魅力が、サイモンの議論にはあるのだ。このような概念については、どれが正しい解釈かを決定するよりも、それを使えば新たにどのような思考の可能性が開かれるか、どのような新たな使い方が可能であるのかを追求する方が、より上手い扱い方なのではないだろうか。引用した箇所でも述べられていたように、そもそもサイモン自身が『経営行動』の研究を始めた目的も、それによって組織における人間行動の分析に新たな光を当てるためであった。

そうだとすると、別に一つの「正しい」解釈がそれらの概念に与えられる必要もないことになる。一つに統合された内容を持たなくとも、それぞれの文脈において有益な役割を担いうるならば、意味のある概念だということに変わりはない。

最後に、サイモンの主張から倫理学が引き出しうる最も重要な洞察は何かについ

て、個人的な見解を述べて本論の締め括りとしよう。おそらくサイモンが一番非難するのは、人間の合理性には限界があるという事実を認めないことだろう⁴⁰。そのような人間の合理性に対する見方をわれわれは「傲慢」と呼ぶべきかもしれない⁴¹。

⁴⁰ たとえば、新たな選択肢の探究を続行するコストをも計算に組み入れることによって、意思決定の過程を停止する最適なポイントを求めるという「制限下での最適化」モデルに彼の研究が再構成可能であるという主張に対して、サイモンは次のように述べていたらしい。「心理学的な現実性の欠如は、ハーブ[サイモンのこと]が繰り返し行った反論である。」「個人的な会話の中で、ハーブはかつて半分冗談めかしたように、そして半分怒りながら、次のように述べたことがある。制約合理性という彼の用語を誤用して、これまでにないほど非現実的な人間の意思決定についてのモデルを作り上げた著者達を訴えてやろうかと考えたことがある、と。」(Gigerenzer 2004: pp. 390-391)

⁴¹ 人間の能力の限界をきちんと認識することの倫理的重要性について、筆者は環境倫理学における予防原則を扱った論文で論じたことがある。(神崎 2005)

文献

Augier, Mie. & March, James G. (ed.) 2004: *Models of A Man - Essays in Memory of Herbert A. Simon*. The MIT press.

Baron, Jonathan 1985: *Rationality and Intelligence*. Cambridge University Press.

Byron, Michael 1998: *Satisficing and Optimality*. Ethics 109. 67-93.

Byron, Michael (ed.) 2004: *Satisficing and Maximizing*. Cambridge University Press.

Dreier, James 2004: *Why Ethical Satisficing Makes Sense and Rational Satisficing Doesn't*. in Byron (ed.) 2004. 131-153.

Eatwell, J., M. Milgate and P. Newman (eds.) 1987: *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*. Macmillan.

Gigerenzer, Gert 2004: Striking a Blow for Sanity in Theories of Rationality. in Augier & March (ed.) 2004. 389-409.

Kahneman, Daniel 2003: Maps of Bounded Rationality: Psychology for Behavioral Economics. *The American Economic Review*, Vol. 93, No. 5. 1449-1479.

神崎宣次 2005: 予防原則の三つの不明瞭さ.『応用倫理学研究』第2号. 応用倫理学研究会. 53-74.

March, J. G. and Herbert A. Simon 1958: *Organizations*. John Wiley and Sons Inc.

Michalos, Alex C. 1972: Rationality Between the Maximizers and Satisficers. *PSA 1972*. 423-445.

Pettit, Philip 1984: Satisficing Consequentialism. *Proceedings of Aristotelian Society*, suppl. 58, 165-76.

Pitt, Joseph C. 2004: Herbert Simon, David Hume, and the Science of Man: Some Philosophical Implications of Models. in Augier & March (ed.) 2004. 483-500.

Richardson, Henry S. 2004: *Satisficing: Not Good Enough*. in Byron (ed.) 2004. 106-130.

Russel, Stuart J. and Devika Subramanian 1995: Provably Bounded-Optimal Agents. *Journal of Artificial Intelligence Research* 1, pp. 1-36.

Schmidtz, David 1995: *Rational Choice and Moral Agency*. Princeton University Press.

Simon, Herbert A. 1945: *Administrative Behavior*. Free Press. (2nd ed., 1957. 本論では実際には1997年の第四版のペーパーバック版を主に用いており、ページ数の指定などもこれに従う。なお邦訳には原著第二版に基づく、松田武彦 [ほか] 訳 1965: 『経営行動』ダイヤモンド社. と、第三版に基づく、松田武彦, 高柳暁, 二村敏子 訳 1989: 『経営行動』ダイヤモンド社. がある。本論での本書からの引用部では、前者の邦訳を参照している。)

Simon, Herbert A. 1955: A Behavioral Model of Rational Choice. (Simon 1957a に再録されている。)

Simon, Herbert A. 1956: Rational Choice and the Structure of the Environment. (Simon 1957a に再録されている。)

Simon, Herbert A. 1957a: *Models of Man, social and rational: mathematical essays on rational human behavior in a social setting*. Wiley. (宮沢光一 監訳 1970: 『人間行動のモデル』同文館出版。)

Simon, Herbert A. 1957b: Rationality and Administrative Decision Making. in Simon 1957a. 196-206.

Simon, Harbert A. 1982: *Models of Bounded Rationality*, Volume 2. The MIT Press.

Simon, Harbert A. 1997: *Models of Bounded Rationality*, Volume 3. The MIT Press.

Slote, Michael 1984: Satisficing Consequentialism. *Proceedings of Aristotelian Society*, suppl. 58. 139-164.

Slote, Michael 2004: Two Views of Satisficing. in Byron (ed.) 2004. 14-29.

Swanton, Christine 1993: Satisficing and Virtue. *Journal of Philosophy*, 89. 33-48.

Swanton, Christine 2004: Satisficing and Perfectionism in Virtue Ethics. in Byron (ed.) 2004. 176-189.

高巖 1995: 『H・A・サイモン研究 認知科学的意思決定論の構築』 文眞堂.

内井惣七 1998, 1999, 2000: 道德起源論から進化倫理学へ. 『哲学研究』 No. 566-567, 569. 京都哲学会.

Weber, Michael 2004: A New Defense of Satisficing. in Byron (ed.) 2004. 131-153. 77-105.

(かんざき のぶつぐ 大谷大学任期制助手)